

あけぼの通信 第9号

2021. 6. 1 (株)浜田あけぼの水産

ご挨拶

社長の室崎拓勝です。今漁期も5月末を持ちまして終了となりました。大きなトラブルも無く無事に漁期終了を迎えられるのも社員をはじめ、水産に携わる方々、そして自然の恵みに感謝です。今期も前年同様に飲食店の休業や自粛により消費市場向けのほとんどの魚種の相場は低調でしたが、水揚金額は浜田港所属船団は前年並み、下関漁港所属船団は大幅に増収でした。これから例年通り6月1日から8月15日までは休漁期間に入ります、この間に資源と乗組員をしっかりと休ませ8月16日からの新漁期の出漁に備えたいと思っております。

機関長紹介

今回は第五あけぼの丸の機関長を務める中房誠機関長を紹介いたします。

中房機関長は現在41歳、浜田の水産高校を卒業してから今日までずっとあけぼの丸一筋で漁師をしてきた生粋の浜っ子です。しかし、その性格は漁師としては珍しく、常に穏やかでおっとりしています。基本的にいつもニコニコしており、声を張り上げて怒鳴るような場面はほとんど見たことがありません。

ただ、機関長として責任感が強く、仕事の際は人が変わったように真剣な表情で作業を黙々とこなし、後輩達にもしっかりと指示を出します。船上と陸上でオン・オフが切り替わる様子は、ベテラン漁師の一人であることを感じさせます。

ちなみに、暇つぶしで始めた某有名スマホゲームにはまり、最近では全国ランキングで上位50位以内に食い込んでいるそうで、ゲーマーとしての一面もあるようです。



今月のお魚紹介 「キダイ」

キダイは全体的な体色は朱色を帯びていますが、目から鼻・上顎にかけてが黄色で、「黄鯛（キダイ）」の名称はこれに由来しています。市場では連子鯛（レンコダイ）と呼ばれることが多いようですが、これは、キダイが海底に群れて生活しており、延縄などで連なって漁獲されるからなのです。島根県ではご飯の代わりとして食べていたという伝承から飯代（バンジロ）とも呼ばれ、昔から庶民に親しまれてきた魚です。かつては結婚式の膳や引き出物にキダイの姿焼きは欠かせない物でした。また、小型のキダイは、芝（シバ）とか芝連子（シバレンコ）と呼ばれ、吸い物の具材として重宝されていました。



しかし、最近では食生活や生活習慣の変化からキダイの消費量は大幅に減少しています。資源的にも比較的安定しており、周年漁獲される魚なだけに大変残念です。

当社で販売している連子鯛一夜干は、山陰沖であけぼの丸が漁獲した新鮮なキダイを、浜の匠が丁寧に手作業で処理し、冷風で干して、鮮度と旨味をしっかりと残したまま急速冷凍したものです。マダイに負けないキダイの旨味を是非味わって下さい。

浜田近況レポート

今年は全国的に早く梅雨入りしましたが、今のところカラッと晴れている日が多く、まだ梅雨らしさが感じられません。本来梅雨はジメジメと蒸し暑く過ごしにくい季節ですが、度々水不足に悩まされる日本では重要な雨季でもあります。昨年の梅雨も雨量が少なかったため、少し心配です…

この時期はあけぼの丸にとっても重要な節目となります。

浜田の沖底船は毎年 6 月 1 日～8 月 15 日の間が禁漁期間となるため、5 月末が最後の水揚げとなります。

ということで、今回はあけぼの丸の切揚（最後の水揚げ・漁仕舞い）の様子をお伝えしたいと思います。

今年 5 月 31 日、第五・第六あけぼの丸と第十一・第十二あけぼの丸が今漁期最後の漁獲物を水揚げし、競りが行われました。

深夜より荷降ろしを始め、早朝の競りに間に合うよう魚を並べます。

底びき船では珍しい大きなクエも揚がり、朝日が昇るにつれて期待が高まります。



朝 6 時、競りが始まります。

浜田の市場では全国的にも珍しい「懐競り」が行われます。仲買人が手を使って買値を示す際、上着の懐で手元を隠しながら示すのです。これは、他の仲買人に手を見せず、セリ人（競りの進行役）だけに買値を伝えるためです。他の手を見てから値を決めることができない以上、仲買人達は最初から勝負値で挑まなくてはならず、業界ならではの心理戦が繰り広げられます。今漁期最後とだけあって活気があり、良い競りとなりました。

漁期終了に伴い、船から網やワイヤー等の漁具を陸揚げします。

沖底船で使用する漁具は大型で高重量のものも多々あるため、クレーンを使って引き揚げます。



修繕期間が始まると、陸揚げした網を市場に広げて修繕をしたり、船体や船内の補修を行います。



修繕期間は6月上旬～修繕完了までとなり、完了すれば船員達は夏休みとなります。船員達にとって夏休みは陸での貴重な長期休暇となるため、皆張り切って修繕作業に取りかかります。

船体の大きな修繕や専門的な部分については造船所や専門業者によって行われますが、それ以外のところはできる限り船員達が修繕します。陸で手入れをすることも漁師としての重要な仕事であり、何より漁期を通して活躍してくれた船や漁具に対する船員達の恩返しでもあるのです。



今月の一句

